

# 全日本リコ研だより 第5号

平成30年2月3日発行 JRS編集人 小山内 仁



## 巻頭言

全日本リコーダー教育研究会  
会長 牧野 光洋

### 「学ぶことを忘れては前進は為し得ません」

今年度の本研究会主催第42回兵庫・姫路大会は大会史上初の試みがされました。全国各地のリコーダー教育研究会は、そのほとんどが基本的に各地区の小学校、中学校、高等学校等々学校教育に携わっている教員を中心に組織されていますが、兵庫県リコーダー教育研究会は、教員ではなくリコーダー愛好家を中心となって組織、運営されています。その中での開催でした。これは学校教育が発展して社会教育の中に根付いた形を示した大会とも言えます。

毎年全日本リコーダーコンテストが開催される東京も、学校を卒業した、リコーダー愛好家として自主サークル活動をされている団体が900団体以上あるそうです。そのほとんどが、小学校・中学校・高等学校時代にリコーダーに出会い、大人になってから演奏活動を再開された団体です。学校教育の素晴らしき実りが一般団体の活動として見事開花しています。しかし、現在の

小学校、中学校の状況はどうでしょうか？

今の子どもたちが、卒業してから、リコーダー活動を嗜む種は蒔かれていますでしょうか？

新学習指導要領も示された、子どもたち一人一人の発達をどのように支援するか、主体的・対話的で深い学びの実現等に、本研究会がどのように関わっていけるか、大きな課題です。そのためにも、学校教育の音楽教科に携わる我々教師の指導力の向上が不可欠です。指導者自身が、リコーダーを吹くこと、楽しむことを放棄しては、「学びを忘れた」ことになってしまいますか？指導者一人一人の資質を高め、将来、リコーダーを通じて素敵な人生が過ごせるようにしたいものです。

息を入れれば簡単に音が出て発音に関してあまり労のない楽器ですが、リコーダーという楽器を教えることは並ならぬ努力と忍耐が必要です。その発音された楽器から奏でられる音をどのように楽音として児童・生徒に感得させるか。どうやって創造力を発揮させ、いかに学びの中で楽しませるのか。リコーダー教育の未来に、さらなる光を与える道しるべとなるべく、各会員のさらなる努力に期待し、「難しいものと思わず努力せよ。教養高き人格者になれ」と、互いに声を掛け合っていきたいと思います。

## 第38回 全日本リコーダーコンテスト 審査員寸評



### 作品の和声的意図を大切に

東京藝術大学非常勤講師  
審査委員長 吉澤 実

合奏の部を審査した感想です。

合奏において、メロディ表現や音程などの技術的側面には練習の成果を伺えますが、和声の魅力にはあまり触れていないと感じました。

和音が連続するとその連続響きに緊張感や安心

感、終止感などを感じます。この和音の連なりを和声と言います。和音は音の集まりですが、その集まった音の並び方で隣り合わせの和音同士に相性が生まれ、和音の組み合わせが様々なドラマをつくって行きます。これが和声の持つ力です。特にメロディに和音がつけられているホモフォニーの作品において顕著に現れ、作品にドラマ性を感じることができます。現代作品では、散文詩のようなポエティックなフレーズも多々現れます。

和声はメロディに色彩感や、陰影感、立体感、遠近感などをつくることもできます。

バス声部をコントラバス(サブバス)でオクターヴ重ね

る場合はあまり問題がおきませんが、内声のアルトやテノールパートをバスやグレートベース(グロスバス)でオクターヴ重ねるとその和声の美しさが失われ、作曲家のイメージした和声進行が崩れてしまいます。

パイプオルガンでのレジスター効果をリコーダー合奏に応用することは様々な表現可能性を生み出しますが、レジストレーションは和声進行を読んで慎重に行わなくてはなりません。闇雲に全てのパートをオクターヴ重ねることはその作品の持つ性格を壊してしまうこ

とになりかねません。

楽曲のもつメインテーマは、時に特徴的なリズムであったり、メロディであったり、和声であったりします。

演奏しようとするフレーズがどんな音姿で、どんな形式で、どんなテーマが全体を導いて入るのかを見定めていくことが大切なことだと感じました。

コンテストの演奏を省みることで、音楽の三要素「リズム、メロディ、ハーモニー」の原点を考えるよい機会になることを願っています。



横浜国立大学非常勤講師  
リコーダー奏者

## 川端りさ

大ホールでの審査をさせていただきましたが、今年は一休感のある演奏をするグループが目立った印象でした。特に、沖縄・浦添市立仲西小学校、台湾・桃園市文山國小の2校は先生の指揮が明瞭かつとても音楽的で、生徒たちの持つ音楽性をひとつに束ね、表現力を引き出しているという印象を受けました。またそのような優れた指揮があるからこそ、リズムの一体感、アーティキュレーションの統一感が鮮明になるのだと思いました。

また、同時に、音程が良いグループが目立ったという印象がありました。上記2校に加え、北海道・北海道標津高等学校、沖縄・浦添市立宮城小学校は音程が曲全体を通して安定して良く合っていました。リコーダーという楽器の音色の特徴だと思いますが、1パートを2人

以上で演奏する際、全員がヴィブラートをかけると、微妙にずれている音程が音の響きを多少曇らせてしまいます。特に大勢のグループでは霞がかかったような響きになってしまいます。大抵の場合、生徒たちは意図しないヴィブラートをかけている可能性があります。まずはヴィブラートをかけない音と、かけた音を意図的に演奏し、その違いを体で感じ取ることが必要です。次に美しく響くまっすぐな音を出せるよう、チューナーで音程を確かめながらロングトーンで音階を個人練習し、自分の楽器の音程、各音の音程の癖、自分の息遣いの癖に気付き、安定して音程を保てるようになることが大切だと思います。その後各パートのメンバーで同じように音程を合わせる練習をするとよいと思います。自分の音を聴く、また相手の音を聴くということが重要です。大勢の演奏ではこのように、なるべく意図していないヴィブラートを避けた方が響きはクリアになります。ただし、1パート1人ずつの演奏の場合は各自が適切にヴィブラートを用いて、自分の表現を曲の中で効果的に出していくことが必要だと思います。



## リコーダーの魅力

リコーダー奏者

## 田中せい子

今年も皆様の数々の熱演に心より拍手を送らせていただきました。

また、私が数年来感じている、リコーダーのために書かれたオリジナル曲を演奏してほしい、という願いが少し届いたのか、今年はそのような曲でのエントリーがより増え、嬉しく思っています。

今回傑出していると感じたのは北海道標津高等学校のカプリオール組曲の演奏でした。リコーダーという楽器の自然な響きをよく出しながら、舞曲の基本となる3和音の純正な合わせ方が正確でした。また、リコーダー

の得意とする短い音の切りを細部までの確に使いこなし、リズムをととても正確に演奏していたのも素晴らしいところです。ここにさらに正確なフレージングと、それを支えるより安定したプロウイング、よりふさわしいアーティキュレーションが加われば、もう言うことはありません。演奏指導をされた古城一樹先生には敬意を表したいと思います。今回の結果はこの方の持つ、音程、音色、リズムについての鋭敏な感覚に依るところが多いのではないかと想像します。

リコーダーはとてもシンプルなことを、正確な音程(主に純正な3、5度が決まること)、響き、リズムで行った時に他の楽器を寄せ付けられないほどの魅力を発揮します。それは、この単純で、強弱も出ず、音も割れやすく、おもちゃとも間違えられそうな楽器で、ここまでの響きを作り出せるのか、という驚きと共に、この楽器に対する認識を新たにするほどインパクトのあるものです。

ウォーロックのカプリオール組曲は20世紀の作品ですが、ルネッサンスの舞曲に基づいて書かれているので、レパートリーとしては非常に適切な選択であったと思います。

リコーダーのために書かれた曲は、歴史的に見ても、このリコーダーの良さを引き出しやすい曲：タンギングの軽やかさや、響きの美しさを出しやすい曲、が当然ながらたくさんあります。もちろん現代に書かれた曲であっても、それらの点に配慮のある曲であればきっと素晴らしい演奏につながるでしょう。一方、リコーダーにあまりふさわしくないというのは、強弱の幅が大きい、和音が複雑すぎて純正な響きで合わせられない、アーティキュレーションの変化をあまりつけられない等の曲です。

私が皆さんに、さらなるステップアップのために知っていただきたいのは主に次の2点です。

1) 息の流し方について。息の流れの中にタンギングのリズムを入れないように演奏してください。息はいつも川の流れるようによどみなく、曲のリズムとは関係なく流してください。音が細く切れる時も息は切れません。切るのはタンギングだけの仕事です。タンギングで音を切る瞬間、そこで息は止めず、お腹からどンドン流し続けてください。タンギングするごとにスピードのある息を舌で遮っている感覚があればOKです。逆に、タンギング

するたびに、息をまた出し直すイメージがある場合はタンギングと一緒に息が止まっています。

2) 3和音の合わせ方。3和音は基本、純正の響きで取るのが、リコーダーアンサンブルには適していると思います。歴史的にもこの楽器のためのレパートリーは純正な響きが生かされているものばかりです。したがって、平均律よりも長3度は狭く、半音は広くなります。例えばハ長調で考えれば、ド→ミの3度は狭く、ミ→ファの半音は広く、ソ→シの3度は狭く、シ→ドの半音は広く、といったようなことに気をつけながら、和音作りをしてください。曲の最後の2つの和音はV→Iの響きであることが多いので、これを前述の方法で丁寧に合わせるのが基本です。

当然、全日本リコーダーコンテストを開催する趣旨は、リコーダーという楽器のためにあるのではなく、それを演奏する皆様のためにあるわけで、それも主には小、中、高等学校の音楽教育の中でのイベントであることは十分承知しております。それでも、少しでも多くの方がリコーダーという楽器の独特の美しさを認め、演奏を聴いた人が演目や技巧よりも、楽器の響きの美しさに魅せられるような演奏を目指していただければ、リコーダーを専門とする者にとって、これほどの喜びはありません。



## 「始める前に」、と「始めた後に」

リコーダー奏者

吉澤 徹

本年の全日本コンテストでは、私は昨年に引き続き「合奏の部」審査を仰せつかり、幾多の素晴らしい演奏に接する事が出来ました。これまでの私の拙文に於いては、主に全体的な印象から、演奏者なりの音楽に対するアプローチの進め方、と云った様な事を認めて参りました。これは、皆さんが通常の練習とは異なった切り口で、多様に練習に取り組んでもらう、と云う観点からの気持ちでありました。

審査講評やこの場での文章を通じ、私からの「投げたボール」が、皆様方の化学変化の途上で、如何にして聴き手に投げ返されるかな？ と云う興味を持って、本年は当日審査に臨みました。今回は皆さんの演奏について、具体的な二つの団体について、印象と私見をお伝えしたいと思います。

有る30余名の団体。バスリコーダーを除き全員が樹脂製のリコーダーで演奏されていました。全日本のレベルなので、いずれの団体も音色の統一感は確りと有る

のですが、こちらでは、「樹脂製ならではの際立ったサウンド」を表現されておりました。全く悪い意味ではなく、木管では絶対に出せない倍音系統の異なる雰囲気、そのイメージを最大限に活かせるかの様に日本の伝統的な曲を選曲され、いささかの特殊奏法と共に、云わば自分達の音色を「個性」と云う武器として活用されていました。いにしえのリコーダーとは違う、当時代的なオリジナリティを持つサウンドが、選曲の妙で大変効果的に躍動し、感心させられました。

また一方で、有名な現代作品を、殆ど1パート1名 +  $\alpha$  といふかなり少人数の、しかし先生が指揮に立たれた合奏がありました。奏者が個々の楽器を究極まで追い込み、タンギング、音程、和声感、息のスピード及び減衰感と云った要素が完全に融合し合い、素晴らしい響きが会場に響き渡りました。勿論演出が無い訳では有りませんが、パーフェクトな吹奏技術に依る発声は、シンプルにそれだけでも美しさに聴き手が酔いしれるものだ、と云う事を実感致しました。前述の団体のサウンドとは対極に有る、オーセンティックなリコーダーサウンドの醸し出す凄み、を見せつけられました。

前回私は練習するにあたり、「始める前」と云う文言で事前のイメージ創造について拙文でお伝え致しました。上記2団体の演奏は、逆説的ですが単にイメージ

だけを追うのでは無く、先生が選曲段階から明確な、「作品の持つイメージ」と「演奏者個々の到達し得るサウンドのイメージ」を持ってひたすらにご指導されて来た賜物であり、本大会の舞台で大輪の花を咲かせた根源で有ると推察致します。そしてもう一つ、上記それぞれが現代に於ける作品、若しくはアレンジである事にも注目致しました。(残念ながら古楽曲で上記イメージに至る演奏はありませんでした。)

本来リコーダーを歴史的に鑑みると、弦楽合奏と違

い、1パート複数の「合奏」と云うカテゴリー自体がバロック以前には想定されて居りません。しかし、この楽器が活躍した時代の楽曲は宝の山の様なものです。

私も一笛吹きとして独奏重奏に親しみ、「合奏」カテゴリーで指導する立場もあります。自らも含め、バロック・ルネサンス以前のレパートリーにも果敢にトライし、理屈抜きでいにしへの響きの中に身を置く喜びを得られる様、どうアプローチするのかを確りと研鑽し、また、皆様にも挑戦と実践を大いに期待致しく思っています。



### 第38回 全日本リコーダーコンテスト 審査を終えて

リコーダー奏者／上野学園大学講師

太田 光子

全日本リコーダーコンテストの審査に加わらせていただくようになって数年経ちました。毎回、ご指導されている先生方及び子供たちが心をこめて取り組み、練習を積み重ねてきた、その努力を感じます。みなさまの演奏をお聴きできることに、本当に幸せを感じております。

今回私は「独奏・重奏の部」を担当いたしました。全体的には、例年に比べて比較的中学生の部において意欲的、印象的な団体が目立ったように思います。

私がリコーダーを演奏する際に最も大切にしていることは、「リコーダーが本来持っている音色の美しさ」、そして「曲を理解し、リコーダーでそれを自分の言葉として語り、歌うこと」です。コンテストの審査の際にも、私はそこをポイントの一つとして重要視しています。その点で最も優れていた演奏は、三重県のスイッチリコーダーアンサンブルによる、J.J.クヴァンツのデュエット変ホ長調作品2-4でしょう。第1楽章が始まった途端から、作曲家の意図を捉えてそれを演奏に生かし、結果表情豊かに変化に富んだ音楽づくりができていく様子に、私はくぎ付けになりました。例えば、このデュエットはクヴァンツ自身が曲中でフォルテ・ピアノの強弱を指定しています。二人はその指示に忠実に従った演奏をし、単に強弱をつ

けるにとどまらず、ピアノからフォルテになった時には大胆なほど積極的に出てみたり等、強弱の記号に音楽的な意味を見出し、表現している様子は、本当に素晴らしかったです。

この曲が収められている「6つのデュエット集」(ベルリン、1759年)の序文に、クヴァンツ自身が「良いデュエットの作品を練習することは、音楽を学ぶ上で非常に有意義である」と書き残しています。なにしろたった二人で練習できて手軽なことですし、曲のしくみを学ぶ上でも、アンサンブルの練習をするという意味でも、コンテストのための選曲としてではなくても、ぜひ一度練習してみると、きっと多くのことが勉強できると思います。

他にも強く印象に残った団体として、高校生の部ではサンマルティーニの協奏曲へ長調を演奏した静岡リコーダー教育研究会、小学生の部では、A.ヘーベルレの「簡単な行進曲と二重奏曲を演奏した北海道の北広島エアリードット。この2団体は、コンテストの大舞台だ、という気負いを感じさせず、純粋にリコーダーと音楽を心から楽しんでいる余裕も感じられ、それが上手く音楽に反映されていて、堂々たる演奏でした。

また、鹿児島市立吉田北中学校、北海道網走市立第五中学校、北海道札幌市立西野中学校、三重県鈴鹿市立旭が丘小学校の演奏も、丁寧に仕上げられており、かつ伸びやかな演奏を展開させていく様子が、何とも魅力的でした。

さて、また来年はどんなすばらしい演奏に出会えるでしょうか？今からとても楽しみにしております。



### 第38回 全日本リコーダーコンテストの 感想

大阪音楽大学名誉教授

北山 隆

最近はこのコンテストはとても楽しくなってきました。何故かって？今まではこのコンテストで演奏される

曲が何度も登場することは、それはそれなりに面白いことでしたが、最近新しい曲が多くなってきたことです。

近年楽譜事情が大きく変わりました。パソコンの楽譜作成ソフトの充実により作曲家が出版元になり、どんどん精力的にリコーダー作品が生産・販売され、またネットの活用では様々なところからオリジナル楽譜や多くのアレンジ作品を無料で手に入れることができ

るのです。楽譜の入手に苦労した昔は遠い世界になりました。今は作品の洪水状況にあると言ってもおかしくありません。

そんなことでどんどん新しいもの、新しいアレンジものが紹介されるのですから、コンテストに臨んでこんなにありがたいことはありません。

ところが今回の演奏で一番心に残ったのは三重県鈴鹿市の旭が丘小学校のA.ワグナーによる「コンチェルト」です。4人のぴったり合った音楽感がスムーズに曲を進めている。バスの楽器がちょっと湿りすぎたかと思ったのも余計なこと、確実に全体を支えている貫禄に感心！そして何よりも二曲目のアリアです。この曲は度々コンテストに登場してきましたが、今まで退屈としか感じなかったものを実に美しいものにしてくれました。リズムとテンポ、そしてフレージングがブレスの場所も手伝っての、聴き手の心に届くメッセージと成っていました。

近年変化してきたことのもう一つは中学生の力が大きくなったこと。

出場件数はまだ少ないですが、独奏の部では北海道の大曲中学校の北野君の演奏が注目されました。後のお二人もとてもよく吹きました。

ただ、前にも言いましたが小学生と音楽、中学生と音楽、高校生と音楽の対峙として一たまたまわが国では小、中、高ですが「人間の成長段階と音楽へのアプローチ」を考えていただきたいと思っています。特にこのコンテストは全日本リコーダー教育研究会ですか

ら、音楽面の向上とともに人格の育成につながります。

余程の神童なら歳に関係なく、文句なしに感動する音楽を奏でるでしょうが、中学生では作られた作品がその作曲者を取り巻く社会、時代なども含めて出来る限り素直な姿で、余計な解釈もなく具現されることが望ましいと考えます。

その意味で北野君の演奏は変奏のバラエティを見事に吹き分けていました。

こうした独奏の実力は多分しっかりレッスンを受けているのでしょう。同じ中学生のアンサンブル、重奏の部となるとややレベルが気になります。しかし上手いグループもあり、中学生の部全体として向上が感じられるで、これからの期待されるセクションとして上に書いた「中学生と音楽の対峙」を考えつつ本領を発揮して欲しいですね。中学生以上の高校・一般の部ではもっともっと頑張っていたかかないと中学生に追い越されるのは明白です。

中学生、頑張れ！

こうした素晴らしいコンテストの中で辛いこともあります。今回小ホールでの演奏のアナウンスでC.P.E.バッハの作曲者名をただ「バッハ」とだけだったのが大きなショックでした。シュトラウスだけではヨハンなのかりヒアルトなのかわかりません。ヨハンでもややこしいくらいですから。審査にも微妙に影響する可能性があります。今後はエントリー側も主催者側も正しく紹介できるよう望みます。



桐朋学園大学古楽科非常勤講師  
リコーダー奏者

## 古橋 潤一

ここ数年、コンテストを聴かせてもらって「面白かった！」と思ったことが殆ど無い。

いつも思うことだが、音楽を審査すると言うことは大変難しいことだ。算数のように「正解」と言うものが無いからだ。聴く人が10人いれば10人の感じ方がある。それを聴いて「良い」と思う人もいれば「面白くない」と思う人もいるわけだ。

ただ、こういう演奏は良い演奏とか、こういうことをするのは好ましくないという、漠然としたものは有るには有る。そういう考え方で審査すれば点数はそこそこ出すことは出来るが、これも審査員の好みで点数に隔たりが出てしかるべきだ。

それを踏まえてこの数年、審査員同士で点数に酷い

偏りというものがない。これはおかしなことだと思う。「全体的にレベルが上がったから」という考え方もあるだろうけれど、その逆もまたありえるのだ。僕は段々個性が無くなってきている気がする。だからつまらないのだ。

以前は楽しい演奏がいくつもあったと思う。楽しいということは、それがもう「音楽」なのだ。このコンテストの意義はそういうところにもあるのではないかと思う。前にも書いたかもしれないけれど「音楽」すること、楽しむことの延長線上に「金」「銀」「銅」のタイトルが無ければおかしいと思う。会長が「銅は金に同じと書き、銀は金よりも良いと書く」と仰ってたけれど、それはこういう精神でコンテストに臨んで初めて成り立つ言葉だと僕は思う。

昨今は、タイトルを取りやすい曲を選び、結果のみにすべてをかけているような演奏が多い。そういう考えでコンクールに出るのは（僕もコンテストを受けていたので気持ちはわかるのだが…）後の演奏の向上には繋がらないと思う。その曲だけは上手に演奏できます！

では駄目だと思うのだ。

また、もの凄い現代曲をスマートに演奏する…ように聴かせる演者も多くなった。毎年見るけれど、去年より上手くなってるのかさっぱり判らない。難しいことをやってるんだろうな…と思うだけだ。こんな風に音楽を表現できるようになったんだ!と思わせてはくれないのだ。感想は…あ〜あ…でおしまいになる。コメントをどう書こうか本当に困る。

そんなわけで、来年また聴く機会があったなら、個性のある楽しい音楽を期待している。

あまりにネガティブなことばかり書いてしまったので、自分の中での光明も少しだけ。

毎年頑張っ出て演してくれてるけど中々いい成績が

取れない、いくつかの学校があるけれど、同じ人がずっと出てきてくれるところも覚えているものだ。そのグループが少しずつ上手くなってきているのは感る事ができた。良い点を付けてあげたいけれど、音程やタイミングなど、点に出やすい部分で失敗してくれると、さすがに良い点はあげられない。けど、心の中では応援してる。

新潟方面、神奈川方面、静岡方面、期待してます。

今年は北海道の学校はとても上手かった。西の方の方々の演奏は少し僕の取っては飽き気味。

あ、1グループだけ、僕にとってはとても理想的な方向に向いて来たところがあった。直接褒めたいけど、まだ兆しだけだからもう少し様子を見ようかな。



## 「4人でリコーダーを演奏すること」

リコーダー奏者

森吉京子

リコーダーのアンサンブルでは、誰でも、ソプラノ歌手にも、アルト歌手にも、低音が魅力のバリトン歌手にも(!)なれます。リコーダーアンサンブルの中で音楽を奏でる自分は変幻自在、それがリコーダーアンサンブルの大きな魅力の一つです。

毎年、子供たちが一生懸命ステージで演奏するコンテストで、長時間にわたってリコーダー四重奏を聴かせて頂いていると、四重奏は「アンサンブルの基本形なのだなぁ」と実感します。

高音で繊細な旋律を奏でるソプラノ・リコーダー、暖かみのある低音を聞かせるバス・リコーダー、時にはソプラノ・リコーダーとデュエットになったり、テナー・リコーダーと一緒にアンサンブルの内声を充実させたりするアルト・リコーダー、バス・リコーダーと一緒に低音を充実させたり、ソプラノ・リコーダーの旋律と一緒に歌うテナー・リコーダー、各パートにはそれぞれ重要な役割があります。

リコーダーは、ソプラノ運指とアルト運指を覚えてしまえば小さなサイズから大きなサイズまで誰でも演奏することが出来ます。サイズの異なるリコーダー、音を出すことは出来るけれども、アンサンブルの中でのそれぞれのサイズのリコーダーの役割をちゃんと理解しながら演奏することを、うっかり忘れていませんか？

例えば弦楽四重奏だったらどうでしょう？

もちろん個人差はありますが、二艇のヴァイオリン奏者は、すぐに自分のヴァイオリンをチェロに持ち替えて低弦パートに移ったり、その反対に、チェロ奏者がヴァ

イオリンを持って旋律パートに移ったり、ヴィオラ奏者がヴァイオリンやチェロに移ったりすることは難しい場合が多いでしょう。つまり、弦楽器の場合は一つのパートに留まるのが普通です。そんなふうにと考えると、リコーダーアンサンブルを楽しむ人たちよりも、弦楽四重奏を楽しむ人たちの方が、それぞれの楽器の特徴と役割をより深く理解しているかも知れません。

誰が楽器を持ち替えても大抵はすぐに音の出るリコーダーの場合には、異なる大きさのリコーダーの特徴や四重奏の中での各パートの役割を知る努力を特に意識をして続ける必要があるのです。そんな練習をしているアンサンブルからは、バランスよく安定した和音がたくさん聴く人に届いてくると思います。

四重奏のような小さな編成のアンサンブルでは、日ごろの練習で交わされる音楽的な意見の交換までもが音色になってステージから伝わってくる場合があります。客席にまで各奏者の「対話」が届くとき、アンサンブルは本当に興味深く、そして奥行きが深いなぁいつも感じています。

# 第42回全日本リコーダー教育研究会 全国研究大会「兵庫姫路大会」開催報告

兵庫県リコーダー教育研究会 会長 香山 美穂

第42回全日本リコーダー教育研究会 全国研究大会「兵庫姫路大会」が10月14日(土)日本の誇る世界遺産、姫路城のお膝元、姫路キャスパホールで開催されました。

この度の研究会開催に際して、教師ではない私が「兵庫県リコーダー教育研究会」の代表を務めさせていただく事に不安と葛藤もありましたが、リコーダーアンサンブル・ドルチェの活動を通じて、地域と社会教育の重要性を学ばせていただく機会を多くいただき、今回の研究会の方向性が定まりました。

近年、日本の地域では、人口減少、超高齢化が進み、中には消滅自治体も出てきています。問題は(都市部と過疎地域では事情は異なりますが)「学校」「子供」を取り巻く課題。地域では統廃合により「学校」という拠点を喪失することにより、過疎地域は更に疲弊してきます。その様な子どもがいない地域での社会教育とは、公民館活動などを通じ高齢者だけでなく、年代、性別、立場を超えて互いに支え合う仕組みづくりが「地域活性化」に重要、いずれにせよコミュニケーションが大切になってきます。その手段として誰でも演奏することができる「リコーダー」が今、注目されています。今回の研究会では学校教育と社会教育の両方のリコーダー教育について考える機会を持ってないかと考えました。

午前には、伊丹市松崎中学校2年生による公開授業、表題「表現を工夫しよう」に基づいてグループに分かれ協力し合いながら、美しい音色を創り上げていくための工夫が感じられました。

午後の開会式では兵庫県教育委員会より土屋社会教育課長、開催地である姫路市石見市長は「灘のけんか祭り」の栈敷を抜けてお越しくださり、「学校園において音楽に触れる機会や文化的な体験活動を充実させることにより、豊かな感性や情操を培い、生涯にわたって芸術を愛好する姿勢や心情を育てることが大切である」とのご祝辞をいただきました。

開会式に続き、提案演奏。最初の団体は、赤穂市児童合唱団と上郡リコーダークラブの合同演奏で、金子みすず詩、湯山昭作曲、北村俊彦編曲による「こだまでしょうか」「大漁」を見事な表現力と元気な歌声で魅了。続いて、全日本リコーダーコンテストに3大会連続出場している伊丹市立松崎中学校は吉木先生の編曲による「わらべうたパラフレーズ」懐かしいメロディを美しく歌い上げ、リコーダー合奏の魅力を再認識させてくれました。最後に、はりまりコーダーコンサート、普段は兵庫県内4つのリコーダー団体で活動している21人が今回の大会のために集結。少ない練習回数の中、楽しく交流し演奏することができました、今大会の裏方としても大活躍(感謝)。北村俊彦先生の実技指導。3年生の導入曲を合奏に繋ぐ極意を楽しくご指導いただき、参加された皆様より、「実際の授業で直ぐ実践したい」という声が聞かれました。

記念講演としては、全日本リコーダーコンテストの審査員でもある、森吉京子先生より、リコーダー専門誌の編集を通じて知った全国各地のリコーダーオーケストラの取組みを素敵な演奏を交えながらお話いただきました。

最後に、文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官・初等中等教育局教育課程教科調査官 津田正之先生より、社会に開かれた教育課程の理念により、音楽教科の目標「生活や社会における音や音楽、音楽文化と豊かにかかわる資質、能力を育成することを旨とする」等について講評をいただきました。

交流会においては姫路城の夜景を背景に地元の食材を使用したお料理で、楽しく交流の時間を過ごしました。

最後になりましたが、この度の大会で至らなかった点多々ございましたが、本部、並びにリコーダー研究会各支部の皆様には全国から参加いただき大会を盛り上げてくださいましたことを、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 開会式



## 記念講演



森吉京子氏

## 第42回 全日本リコーダー教育研究会 全国研究大会「兵庫姫路大会」



## 公開授業

## 実技指導



北村俊彦氏

## 全体講評



津田正之氏

## 次回予告

## 第43回 全日本リコーダー教育研究会全国大会 「新潟・佐渡大会」のご案内

### ■ 大会主題

生涯にわたって音楽と楽しくかかわる姿を求めて(仮)  
～リコーダーの特性や魅力を生かした授業や活動の工夫～

### ■ 主催

全日本リコーダー教育研究会・新潟県リコーダー教育研究会  
佐渡地区リコーダー教育研究会

### ■ 主 1.期

平成30年11月22日(木)午後(アトラクション・全国交流会は夜)

### 2.会場

佐渡市立河原田小学校(1日目/新潟県佐渡市河原田本町)  
Ryokan浦島(アトラクション・全国交流会/新潟県佐渡市窪田)  
あいぼーと佐渡(2日目/新潟県佐渡市両津夷)

### 3.内容

<1日目> 授業公開、協議会、全体指導、アトラクション・全国交流会  
指導者:文部科学省教科調査官様(予定)  
<2日目> シンポジウム、合奏研究

### 4.大会参加費

3,000円(資料代)

### 5.その他

第1次案内は平成30年3月25日(日)全日本リコーダーコンテストプログラム、  
全日本リコーダー教育研究会ホームページと新潟県リコーダー教育研究会ホーム  
ページに掲載します。

### 6.お問い合わせ

佐渡地区リコーダー教育研究会 会長 嶋見靖之 TEL.090-5584-7184

～ トピックス ～



こどもとゴールドエイジによる == リコーダーアンサンブル ==

# 杉劇リコーダーず

平取町  
特別公演

■ 主催：杉劇リコーダーず北海道公演を成功させる会 ■ 後援：全日本リコーダー教育研究会、北海道リコーダー教育研究会、平取町教育委員会

このたび、吉澤実先生率いる「杉劇リコーダーず」が北海道初上陸ということで、北海道沙流郡平取町において、初めての北海道遠征で凱旋演奏会を開催しました。



平成29年9月18日(祝)に、平取町中央公民館大ホールにおいて、北海道初の演奏会を開催した「杉劇リコーダーず」は、2006年7月、横浜市磯子区で区民企画事業としてスタートした、結成11年目を迎えるリコーダーアンサンブルです。

メンバーは最年少が8才、最年長80代!!親子で参加しているメンバーもいて、世代を超えて楽しくリコーダーを吹いています。

演奏会当日は台風の直撃を受けましたが、平取町民約100名が来場し、約1時間のプログラムでリコーダーの世界を堪能しました。

中でも小学生の朗読と自作絵が飛び出した「ピーターと狼」は圧巻でした。また、吉澤実スペシャルコーナーもあり、大歓声でアンコールが鳴りやまないほど盛り上がりました。

「リコーダーず」はアマチュア集団です。しかし様々な土地に楽しみながら上演しに行き、気が付けば上手くなり、杉田のみならず磯子のイベントに引っ張りだこだとか…。劇場がコミュニティの中心になる。素晴らしい活動です。

## 全日本リコーダー教育研究会役員名簿

| 役職名    | 氏名  | 担当   | 所属先(平成30年1月現在)   | 役職名  | 氏名  | 所属先(平成30年1月現在)   |  |  |  |
|--------|---|--|--|------|---|--|--|--|--|
| 会長     | 牧野 光洋   |  | 練馬区立光が丘夏雲小学校   | 名誉会長 | 初代 花村 大<br>二代 徳山 博良<br>三代 中澤 正人   | 故人<br>故人<br>板橋区文化・国際交流財団   |  |  |  |
| 副会長    | 小山内 仁<br>小池 純夫<br>親泊 明美   | 財務統括<br>広報統括<br>研究統括   | 平取町立平取中学校<br>新潟県リコーダー教育研究会<br>沖縄県リコーダー教育研究会  | 顧問   | 小原 惇<br>三木 貞夫<br>影山 建樹<br>橋本 勤也<br>越智 健一朗<br>仲本 朝昭<br>皆川 昌雄<br>森 嘉雄<br>日置 美知代<br>原田 彰 | 元新潟県公立中学校<br>元大阪府公立中学校<br>元静岡県公立中学校<br>元高知県公立小学校<br>元東京都公立中学校<br>元沖縄県公立中学校<br>元新潟県公立小学校<br>元新潟県公立小学校<br>元三重県公立小学校<br>元鳥取県公立中学校(故人)   |  |  |  |
| 事務局長   | 井戸 正利   |  | 板橋区立北前野小学校   |      | 名誉会員  | 榊 正治 (鹿児島)<br>玉利 敬三郎 (東京)<br>門野 フミ (鹿児島)<br>太田 正明 (長野)<br>花岡 澄 (長野)<br>砂川 徹夫 (沖縄)<br>八幡 健一 (鳥取)<br>橋本 研 (東京)<br>近藤 誠二 (北海道)<br>中村 毅 (新潟)<br>中島 聡 (故人)<br>南雲 照 (故人)<br>諸岡 忠教 (故人) |  |  |  |
| 事務局次長  | 牛田 恵美   |  | 東京リコーダー教育研究会   |      |   | 相談役  | 吉澤 実<br>上杉 紅童<br>大本 村幸<br>大金 竹尚之<br>金子 健治<br>吉澤 徹<br>北村 俊彦<br>北山 隆 |  |  |
| 本部役員   | 大吉 幸子<br>長谷川 紘子<br>樋熊 三津男<br>上江洲 学<br>漆畑 友美<br>小林 英明<br>根津 江美子<br>富山 和幸<br>香山 美穂  | 事業統括<br>事業<br>広報<br>研究<br>財務<br>研究(長野担当兼務)<br>広報<br>研究(埼玉担当兼務)<br>事業(兵庫担当兼務)                 | 恵庭市立島松小学校<br>福生市立福生第二小学校<br>新潟県リコーダー教育研究会<br>南城市立佐敷小学校<br>川崎市立久地小学校<br>佐久市立中佐都小学校<br>新潟県十日町市立西小学校<br>川越市立高階北小学校<br>兵庫県リコーダー教育研究会   |      |   |  |  |  |  |
| 地区担当役員 | 三笠 裕也<br>菅 圭隆<br>小形 茨<br>嶋見 靖之<br>水谷 美恵子<br>後藤 俊哉<br>鈴木 光静<br>山下 照乃<br>長岡 むつみ<br>金 秀賢<br>松本 聖子<br>福元 さとみ<br>高洲 博子<br>劉 翠華 | 北海道<br>栃木<br>茨城<br>新潟<br>東京都<br>神奈川県<br>静岡県(静岡)<br>静岡県(浜松)<br>三重<br>大阪・韓国<br>鹿児島<br>沖縄<br>台湾 | 北斗市立大野中学校<br>足利市立東山小学校<br>古河市立古河第二中学校<br>佐渡市立高千小学校<br>江東区立臨海小学校<br>横浜市立さわの里小学校<br>静岡リコーダー教育研究会<br>静岡リコーダー教育研究会<br>鈴鹿市立旭が丘小学校<br>大阪リコーダー教育研究会<br>宮崎市立徳中学校<br>志布志市立伊崎田中学校<br>沖縄県リコーダー教育研究会<br>牧笛音楽芸術学苑 |      |   |  |  |  |  |
| 監事     | 馬場 喜久雄  |  | 竹早学園竹早教員保育士養成所   |      |   |  |  |  |  |
| 事務局員   | 安藤 真由美<br>藤藤 京子<br>齋藤 あゆみ<br>奥平 睦<br>新 睦実   |  | 東京リコーダー教育研究会<br>東京リコーダー教育研究会<br>東京リコーダー教育研究会<br>東京リコーダー教育研究会   |      |   |  |  |  |  |

(平成29年10月1日～平成32年9月30日)



## 編集後記

ここにリコ研だより第5号を発行する。今回もコンテスト審査員より御寄稿いただいたことを心から感謝申し上げます。

リコーダーは、日本のほとんどの子どもが自分の楽器として手にする最も身近な楽器であり、器楽教育の分野でリコーダーは重要な役割を担っている。「社会に開かれた教育課程」を理念とする新学習指導要領が平成29年3月に告示され、教科等の特質に応じた「見方・考え方」を通じて社会や世界とどのように関わるかという点が学びに向かう力や人間性の育成に大きく作用することから、音楽科では「生活や社会における音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成が重要視された。

授業の中で、なぜそれを学ばなければならないのかということを実感することについては、教員の意識としても、子どもたちの意識としても弱いのではないかという指摘もある。このため、授業で学習したことが、これ

からの自分たちの生活の中で生きてくるといふ実感を持てるよう、指導の改善・充実を図ることが求められる。学校の学びを生涯にわたってつなげていくことが、これからの音楽教育に課せられた重要なミッションである。その意味でもリコーダーは、教育的特性にあげられる生涯学習楽器としての歴史的な性格や演奏法的性格を持つとして、生涯学習までつなげる強みがある。

私たちリコーダー教育研究会としても、学校や地域で表現する場を用意するなど、リコーダー教育と社会をつないでいくことに取り組み、身近なところから社会に関わる活動を進めていき、来るべき時代に備えなければならない。

本年11月に開催される全国研究大会「新潟・佐渡大会」では、リコーダー教育による子どもの学びを深めていく上で、効果的な指導法や生涯学習楽器としての教育的特性を再確認したいと考える。是非とも全国各地より多くの賛同をご期待申し上げます。

## 入会のお知らせ

本会への入会手続きは随時受け付けております。一緒にリコーダーの花を咲かせましょう！

共に学び、共に成長するリコーダー愛好家の皆さんの入会を心よりお待ちしております。

本会の会員は次のとおりとする。

- (1)正 会 員 リコーダーを愛好する個人で別に定める会費を納める者
  - (2)研究会会員 各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会で別に定める会費を納める団体
  - (3)会 員 本研究会が開催する全国研究大会及びコンテストで参加資格及び出場資格を得た個人及び団体で各事業の申し込みにおいて別に定める会費を納める者
  - (4)維持会員 本研究会の目的に賛同し、別に定める会費を納める者及び団体
  - (5)名誉会員 本会に対し特に功労のあった者のうちから、総会の議決をもって推薦された者。
- (名誉会長、顧問、参与、名誉会員及び相談役の名称で名簿に記載する。)

会費は、年会費として徴収する。

- (1)正会員一人 = 3,000円  
(ただし研究会会員で登録した者は免除)
  - (2)会員一団体 = 3,000円
  - (3)研究会会員一研究会 = 10,000円
- ※研究会会員とは、各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し、本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会を指す。
- ※研究会会員に所属し、会員名簿に掲載されている者は正会員と同様の扱いとする。
- (4)会費の納入は、毎年6月末日までに納入すること。  
(納入方法は別途定める。)

申し込み先 \_\_\_\_\_  
全日本リコーダー教育研究会  
〒179-0072  
東京都練馬区立光が丘夏の雲小学校内 牧野光洋  
住所：東京都練馬区光が丘3-6-1  
電話：03-5998-0501  
FAX：03-5383-3594  
<http://www.zenrikoken.com/>  
Email [zen.rikoken@gmail.com](mailto:zen.rikoken@gmail.com)